「日々の理科」（第 3095 号）　2023,-1,27

「一月大寒波とライオン池の氷（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

気象庁が示している基準では、最低気温が 0℃未満（氷点下）になった日を「冬日」、最高気温が 0℃未満になった日を「真冬日」としている。東京（都心）の冬日は約 100 年間の統計で、平均 20 日程度あるが、真冬日は 1876 年の観測開始から わずか 4 回で、1967 年 2 月 12 日以降、半世紀もの間一度も観測されていない。「暦の上の冬」は約 3 か月だが、東京では気象学的な「冬日」は 1 ヶ月以下で、「真冬日」はまったくなくなったということである。

そんなこともあって、東京では自然の氷は珍しくなった。私がライオン池に到着した時には、もう氷はバラバラに割られていて、ほとんど「収穫」されていた。

子どもたちの行動目的は非常に単純で、「いかに大きな氷片をゲットするか」という一点だけである。

素手では冷たいし、危ないと思うのだが、平気で握っている。厚さはやはり 5mm～1cm 程度の薄氷だった。カメラを向けると、「氷越しに」笑顔になる。

かなり大きな氷片になると、一人で持ち歩くのは難しく、複数の子どもで運ぶ姿も見られた。

この日、最大の収穫物はこの氷だった。長径は 1m 以上あるだろう。この薄さでこの大きさだと、わずかな衝撃でも割れてしまう。案の定、このあと粉々になってしまった。割れた氷も、太陽にかざしたり、教室に持ち帰ったりと、子どもたちにとっては「自然の宝物」だったようだ。当然、氷の池に落ちる子どもが何人もいて、このあと保健室は大変だったようだ。